

**SHINICHI**

**TAKEDA**

**portfolio**

Updated June 2015

武田晋一（たけだ・しんいち）

1981年 広島県生まれ。2003年に渡仏し、  
2009年 ENSA Bourges（ブルージュ国立高等芸術大学）卒業。  
現在、奈良在住。

個展

- 2012 *dissimulation*, star gallery（名古屋）  
2011 武田晋一のアプローチ, space\_inframince（大阪）  
2010 *corporeal ideas*, workroom\*A（大阪）  
二つの、同じようなもの、積み重ねる, chef d'oeuvre（大阪）  
二つの、同じようなもの、積み重ねる, chef d'oeuvre（大阪）  
三四五, iTohen（大阪）  
睦月の落穂拾い, C.A.P. STUDIO Y3（神戸）

グループ（デュオ）展

- 2014 *la Racine et la Neige* + 比留間郁美, FALL（東京）  
2013 *La Nuit Blanche 2013* + Nicolas Herubel + Elyakine Tourabi,  
Centre Jeanne Hachette（イヴリーシュールセーヌ・フランス）  
ない世界、無印良品グランフロント大阪 Open Muji（大阪）  
*The Sunday Curators*, SWG3 Gallery（グラスゴー・スコットランド）  
*OFF SEASON* + 三品輝起, iTohen（大阪）  
2012 *Rojiura Vol.3*、亀崎市一帯（愛知）  
空箱 + sonihouse、空檣（奈良）  
*woodland gallery 2012*、美濃加茂市民ミュージアム（岐阜）  
2011 *Le spectacle de la nature*, Château d' eau（ブルージュ・フランス）  
上の空、万勝S館（名古屋）  
*woodland gallery 2011*、美濃加茂市民ミュージアム（岐阜）  
*ORGANIC RELATIONSHIPS* + 小谷廣代, chef d'oeuvre（大阪）  
2010 飛鳥から奈良へ 国際彫刻展 2010 + 藤本由紀夫, 名勝旧大乘院庭園（奈良）  
こみまる 2nd show, 吹田歴史文化まちづくりセンター（大阪）  
CAP アートマーケット 2010, C.A.P. STUDIO Y3（神戸）  
2009 怖るべき子供たち, chef d'oeuvre（大阪）  
2007 *Courant*, Toko University（台北）  
2006 ~ + Atsunobu Kohira, Pièce Unique（パリ）  
*Première Vue (5th edition)*, PASSAGE de RETZ（パリ）

出版物

- 2010 「飛鳥から奈良へ 国際彫刻展 2010」  
2007 「Courants」, Toko University  
2006 「Première Vue 5th edition」, PASSAGE de RETZ

S E L E C T E D  
E X H I B I T I O N S



*from my house to FALL (11/24, 2014)*

## ***Transracinement***

EXHIBITION... “la racine et la neige”

11.26 – 12.7, 2014

FALL (Tokyo)

NOTE... タイトルの「transracinement」は「trans」（～越えて、横切って）と「racinement」（根を張る）を組合わせた造語。背負っている箱の中には粘土の植木鉢が入っており、また、箱は分解され、組み立てることで展示台となる。FALL 開店当初からあった二つのオブジェを拝借し、植木鉢から生えるように立たせた。陶器で作られた石と棒を模したパーツをおもりとし、オブジェを下に引っ張ることで「立つ」という事が成立している。オブジェ部分は代替可能であるので、他の場所でも展示可能である。



***Transracinement***

wood, ceramic clay, ceramic, acrylic board, wire,

object of FALL, felt, belt

26X75X150cm

2014



exhibition view (right : "3/8", left : works of Mathieu Mercier)

## *The Sunday Curators*

EXHIBITION... "The Sunday Curators"

5.18 – 6.8, 2013

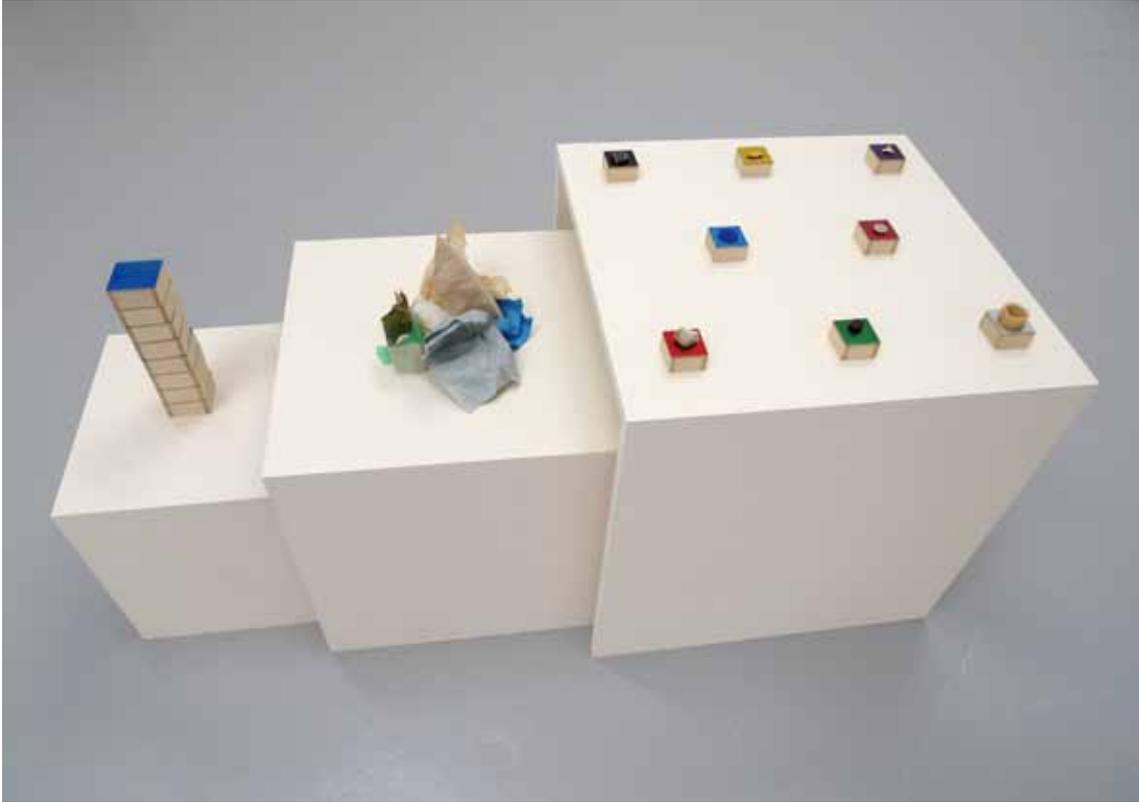
SWG3 Gallery (Glasgow)

Curated by Camille Le Houezec & Jocelyn Villemont

NOTE... 現在はパリに拠点をおいて活動しているキュレーター & アーティストデュオ、  
it's our playground (Camille Le Houezec & Jocelyn Villemont) の  
企画したグループ展。ギャラリースペースでの展示の前に、「The Sunday Curators」  
と題し「日曜大工」ならず「日曜キュレーター」に焦点をあて、私的なコレクション、  
がらくた、思い出のオブジェなどを棚や部屋のキャビネット、暖炉の上などに  
キュレーションした自分だけのミクロ展示を一同に集めたグループ展をウェブ上で行った。  
そのヴァーチャルな展示を踏まえ、今度はリアルなギャラリーで行った。  
参加アーティストにはキュレーターがデザインした什器（展示場所）を充てがわれ、  
そこにそれぞれアーティストがキュレーションしたオブジェなどを配置した。

参照 web サイト

[http://itsourplayground.com/49/the\\_sunday\\_curator](http://itsourplayground.com/49/the_sunday_curator)



**3/8**

plywood, paper, spray, fossil, shell, clock, boxwood, stone, coral, ceramic

50x110x54cm

2013

NOTE... 入れ子式の大中小の展示台に合わせ、3つの展示方法を提示した。一つ目は規則的に並べる、二つ目は、偶然にまかせ置く、最後は、積み重ねる。作品も3つのエレメントからなっている。小さな8つのオブジェ、それを包む緩衝材、そしてそれらを入れる箱。



*from my house to iTohen (3/5, 2013)*

## **OFF SEASON**

EXHIBITION... “OFF SEASON” + 三品輝起

3.6 – 3.17, 2013

iTohen (Osaka)

NOTE... 音楽家・三品輝起に依頼を受け、彼の3枚目のアルバム『OFF SEASON』(RONDADE)に収録されている20曲それぞれに合わせ20個のオブジェをつくり、展示空間でその曲を流した。CD同様、20のオブジェ作品もコンパクトにまとめ、背負って展示会場まで運んだ。またCDのアートワークも担当した。いま旧メディアになりつつあるCDで音楽をパッケージする意味を考え、ジャケット、CD、リーフレット、帯の4つエレメントで構築したオブジェをジャケットのデザインに使用した。2012年に吉祥寺のOUTBOUNDで発表し、大阪のiTohenは2回目の巡回展となる。



exhibition view (iTohen) photo : SKKY

#### TRACK

- 1 ブロンプトン墓地 I
- 2 水脈
- 3 マルコ・ポーロ
- 4 貝殻
- 5 屋上
- 6 電話を待つ
- 7 愛を讀えて
- 8 サーフィン
- 9 鹿 I
- 10 濡れた机
- 11 顕微鏡
- 12 姿のない形
- 13 郊外の生活
- 14 高速道路
- 15 岸を離れる
- 16 見えない都市
- 17 ブロンプトン墓地 II
- 18 鹿 II
- 19 ポリアンナの客室
- 20 水源



#### ON THE ROOF + SHELL + MARCO POLO + WATER VEIN

wood, acrylic board, spray, PVC pipe, sinker, hinge, thread,  
peacock's feather, L-shaped bracket

160x80x25.6cm

2012

at OUTBOUND

photo : Kazuto Kobayashi



Left to Right : **SUBURBAN LIFE, BROMPTON CEMETERY II,**  
**GUEST ROOM AT THE POLLYANNA, INVISIBLE CITY**



#### AWAY FROM SHORE

wood, photo, spray,  
pipe, sinker, hinge, thread,  
ball of glass, clip

32x17x45cm

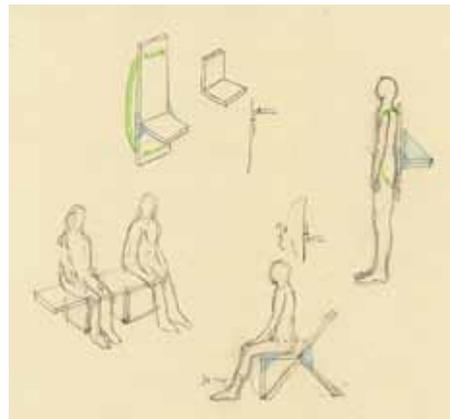
2012



exhibition view (chair for one person)

## く ト

EXHIBITION... 「ろじうら Vol.3」  
10.21, 2012  
亀崎町一帯 (Aichi)



NOTE... 半田市亀崎町という古い港町で行われた一日だけの展示会。作品をどこかに設置し待ち構えるのではなく、作品を携えて歩き回ることを選んだ。歩くときは背負い梯子のような形態にし、歩き疲れたら座れる一人用のイス。また誰かと座って離すことのできる二人用ベンチに変形できるようにデザインをした。



＜ト

wood, acrylic board, spray, belt, L-shaped bracket  
variable size (chair form : 65x60x25.6cm)

2012



## *Les nuages sous le miroir*

wood, spray, acrylic board, hinge

110x90x90cm

2012

EXHIBITION... 「空箱」 + sonihouse

8.3 – 8.12, 2012

空櫓 (Nara)

NOTE... 奈良でスピーカーの設計から製造まで行っている音響ブランド「sonihouse」との協同展示。スピーカーを収納でき、背負い運べる「箱」を提案。また作品を展開するとステージセットとなりライブの「ハコ」を構成した。チェンバースカバンド popo のライブが期間中に行われた。ライブ中は12面体スピーカー「scenery」を背負い観客の中を動き回った。



*"les nuage sous le miroir" stage set version*



*popo's live (8/12, 2012)*



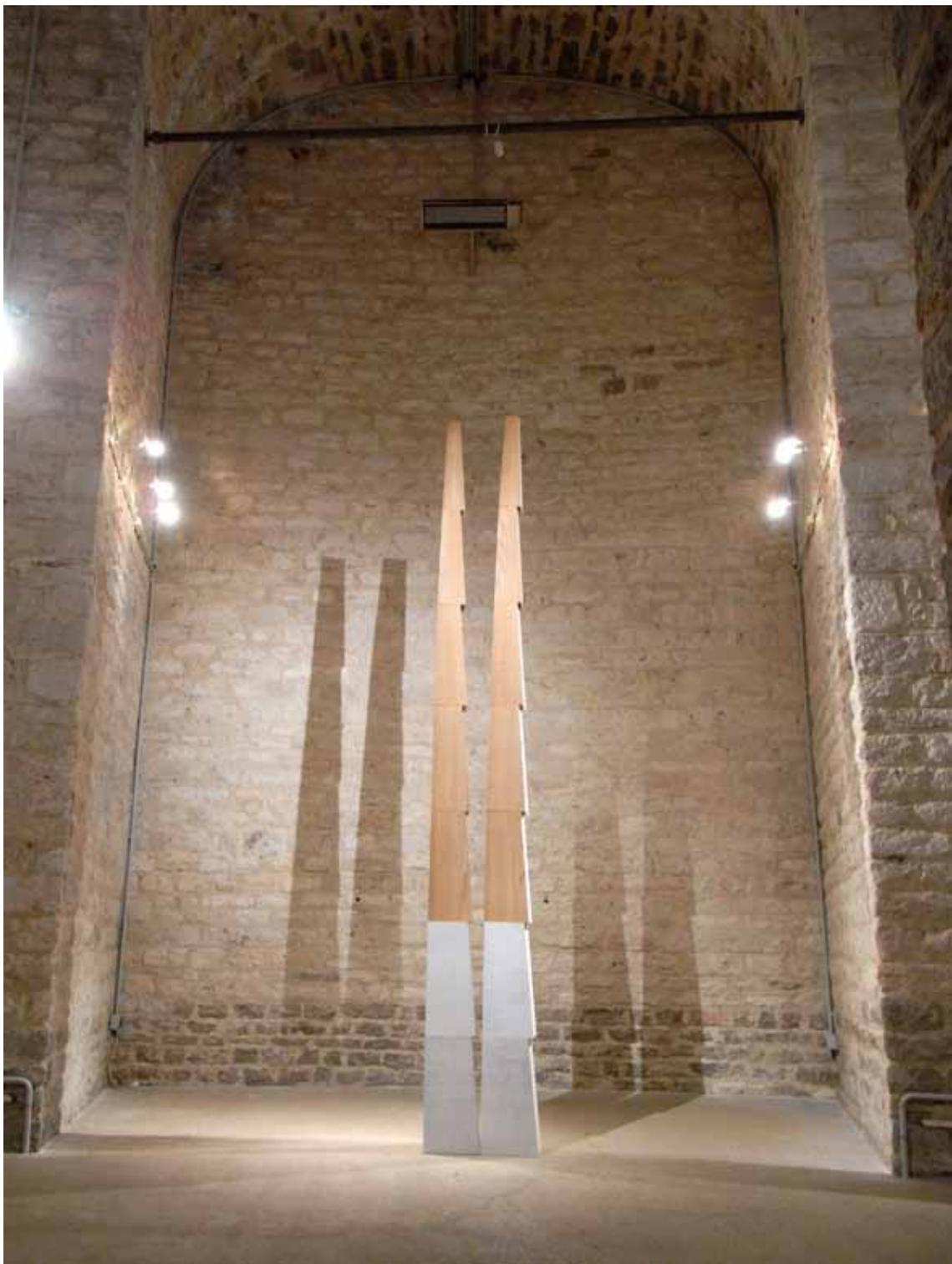


## *Le spectacle de la nature*

EXHIBITION... 「自然のスペクタクル」  
6.25 – 8.28, 2011  
Château d'eau (Bourges, FRANCE)

NOTE... フランスの中央部に位置するブルージュにあるシャトー・ドー（旧給水塔）でのグループ展。3.11の大災害後まもなくであり、窓の一切ない、薄暗くひんやりとした石造りの建築の中で、寄り添っているようで独立している積み上げるだけの祈りのような作品を試みた。いくら地震が少ないフランスとはいえ不安があったが、約2ヶ月間倒れなかった。アトリエのある奈良からブルージュまで背負って運んだ。入れ子式の構造を採用し、飛行機のトランクに入るサイズでつくった。オープニングの途中で背負っていた作品を降ろし、その場で組み上げた。

“「立テル」というのは苦しみを通して、心の中にある「願」を明らかにすることで、中国の古代に、草も生えない泰山の頂きに石を立てた(～)”  
『いけ花の初め』西堀一三著



***La volonté d'architecture***

wood, spray  
20x40x315cm  
2011



## *Takeda Shinichi's Approaches*

EXHIBITION... 「武田晋一のアプローチ」  
5.14 – 6.7, 2011  
space\_inframince (Osaka)

NOTE... オリジナル化粧品の製造、販売、プロダクト開発などを手がける inframince のギャラリースペースでの展示。同スペースではセレクトショップを兼ねているため、作品の展示と商品販売をシームレスで行いたいとの要望があった。スペースで利用されていた合板の什器、それまで制作した作品、そして新たに制作した作品を一同に集めた。オープニング当日は倉庫にしまわれた商品のように一カ所にストックされた状態から、一つ一つ作品を展開し、空間を構成して行った。また作品に商品を置いたり、形や空間構成を変えたりし、様々なアプローチを試みた。



ehhhibition view (5/18, 2011)



5/29, 2011



5/21, 2011



5/29, 2011



## *woodland library*

EXHIBITION... “woodland gallery 2011”  
4.29 – 5.1, 2011  
美濃加茂市民ミュージアム (Gifu)

NOTE... 岐阜の美濃加茂市民ミュージアムで、木に囲まれた野外でのグループ展。  
森の中で作品を見てもらうというより、作品に座り、森を見てもらう装置を提案した。  
入れ子構造、スライド式の移動できる本棚に僕の持っている本の中でまだ読んでいない  
本を並べた。絨毯の上で自由に本を読む事ができるドミニク・ゴンザレス＝  
フォルステルの「tapis de lecture」という参加型の作品があるが、僕の作品では、  
本から目を離れた、その瞬間の時間の方に重きが置かれている。

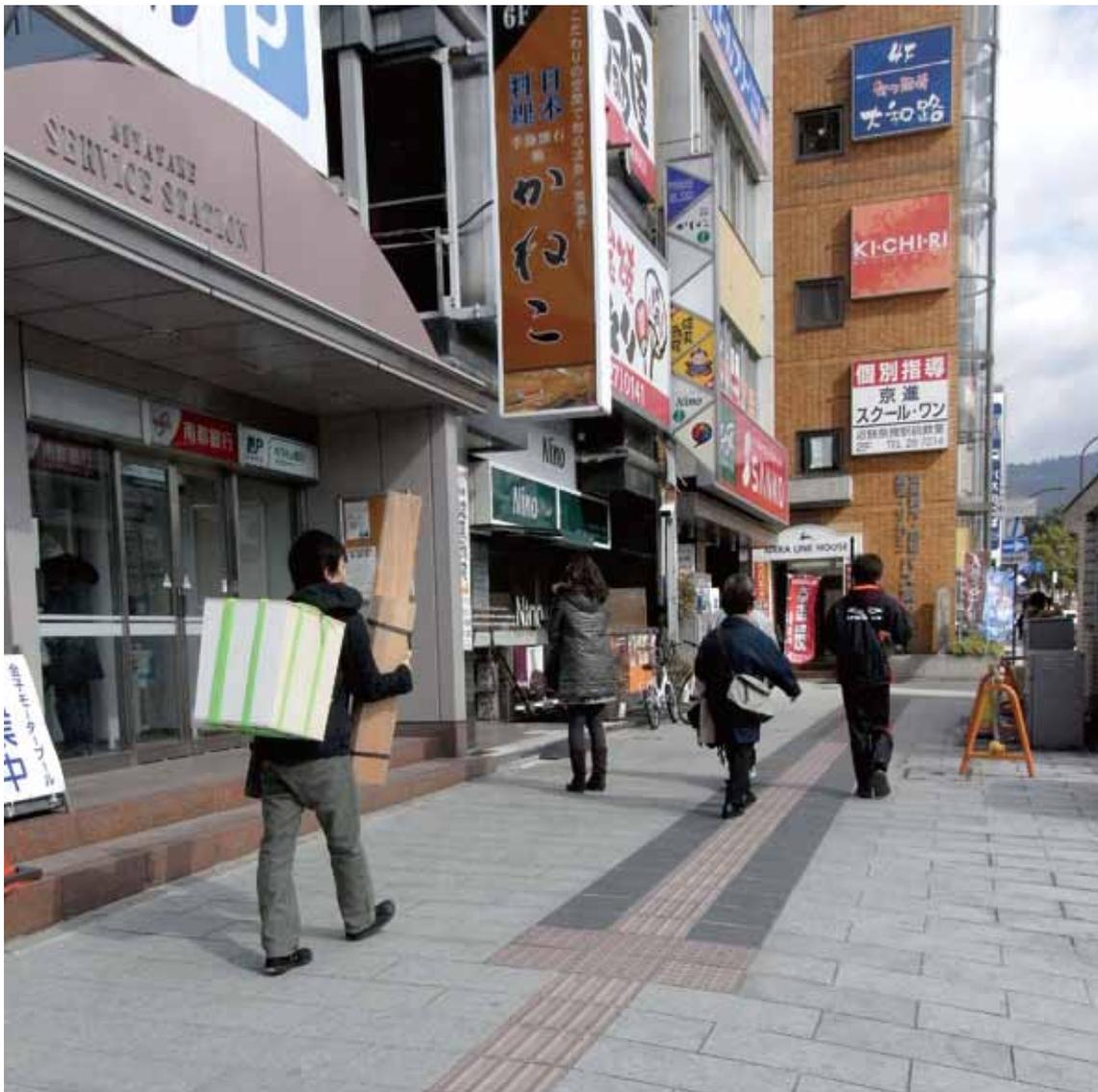


***woodland library***

plywood, spray, book

variable size

2011



## ***ORGANIC RELATIONSHIPS***

EXHIBITION... 「ORGANIC RELATIONSHIPS - 身体から透明性 イメージ」 + 小谷廣代  
2.18 – 3.29, 2011  
chef d'oeuvre (Osaka)

NOTE... 大阪市内にあるシェ・ドゥーヴルというカフェのギャラリースペースで、画家の小谷廣代と二人展。身体と展示空間の関係性と頭上運搬における安定さ、空間内における頭上空間に注目した。カフェスペースの梁、ギャラリー入り口、ギャラリーの天井、そしてギャラリーの梁と自分の頭までの距離を測り、一枚の板をその長さで分割した。土台には入れ子構造の構造物をつくった。4つ積み重ねると自分の身長の高さになる。



***repos sur la tête***

wood, spray, hinge

250x40x167cm

2011





## *corporeal ideas*

EXHIBITION... 「corporeal ideas - 机についての三つのアイデア -」

11.24 – 12.11, 2010

workroom\*A (Osaka)

NOTE... 大阪市内にあるレクチャーやレッスン、展示などを行っているスペース（現在は閉廊）workroom\*Aでの個展。この場所の核となる机と主体についての三つの関係性を提案した。その三つとは、机に物を置くこと、机に隠れること、そして、机の上に立つこと。それぞれのパースペクティヴを体験できるような装置をつくった。また展示期間中もレッスンがあり、通常は他の場所で行うのだが、作品の方を変形することでそれを可能にした。机を持ち上げる箱状のものは、受講者が荷物を置ける棚に形を変え、机の上に置いた枠状のものは机の下にきっちり収まるように設計されている。



*exhibition view (lesson version)*

***corporeal ideas***

***(about the table of workroom\*A)***

wood, spray, hinge, paint, table, plant

180x270x200cm

2010

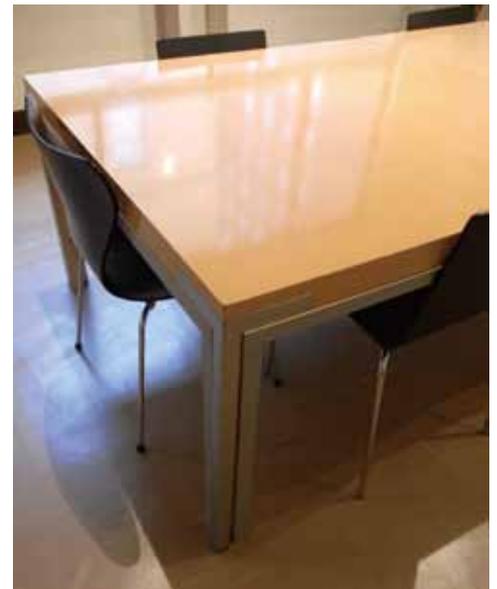




photo : Kiyotoshi Takashima

## ***ECHO (Yukio Fujimoto + Shinichi Takeda)***

EXHIBITION... 「飛鳥から奈良へ 国際彫刻展 2010」

10.26 – 11.7, 2010

名勝旧大乘院庭園 (Nara)

NOTE... 奈良市内にある名勝旧大乘院庭園での国際彫刻展。アーティストの藤本由紀夫さんと協同で作品を発表した。展示場所は庭園内にある建物の茶室。その茶室を一つの「見る」装置として捉え、丸窓から覗く庭をテーマに据えた。協同での作品ではあるが、個別の作品としてみることも可能である。”Light Coordination”と題した僕の作品は、茶室では折り畳まれ鎮座しているが、広げると丸窓と同じ大きさの円になり、背負う事ができる。ハプニング的に背負い、庭を歩いた。一面には銀色の塗料が施され、レフ板のようになっており、庭に点在する他のアーティストの作品の光加減を調節する事ができる。



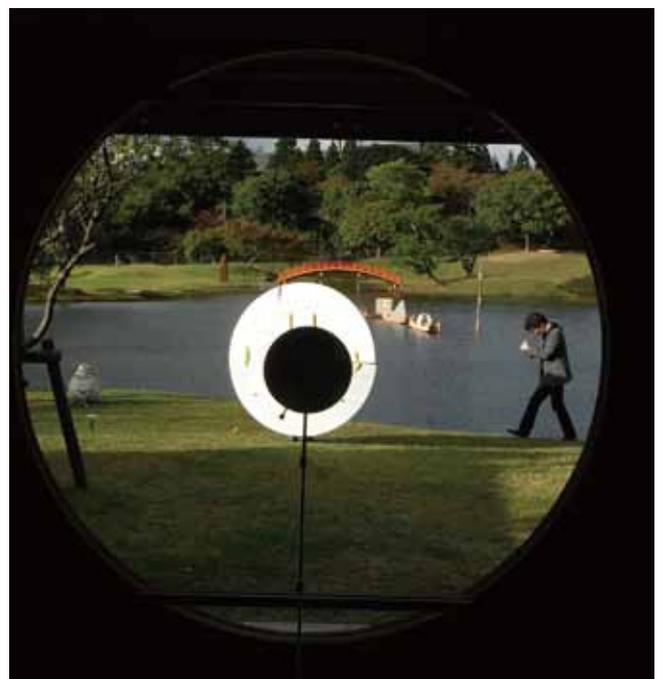
photo : Kiyotoshi Takashima

***Light Coordination***

plywood, spray, belt, hinge

160cm in diameter

2010

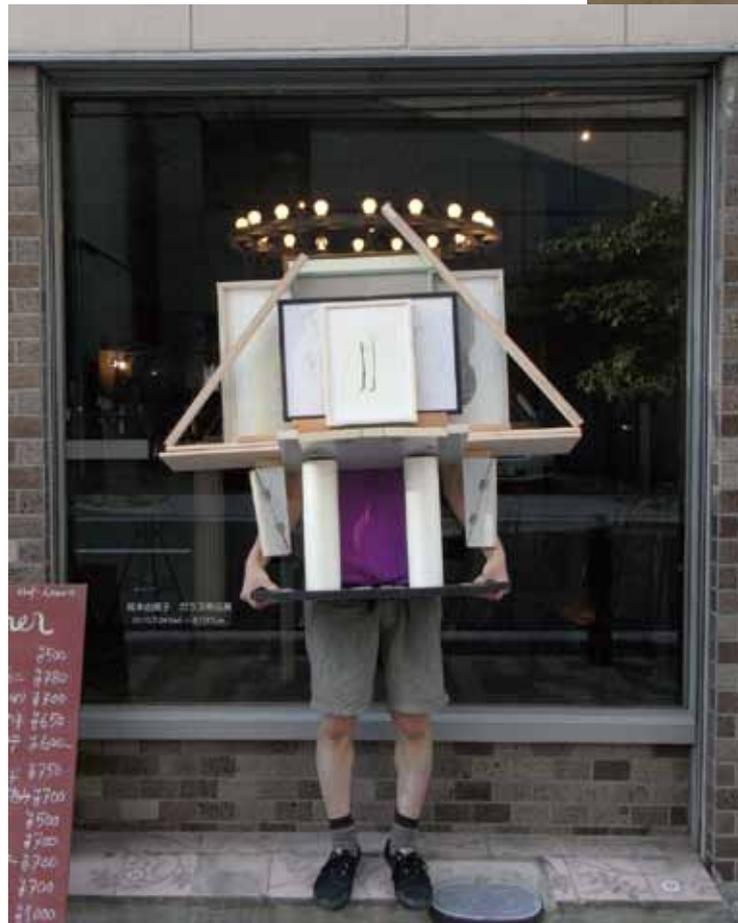




exhibition view



"Jumelage Accumulé"  
(7/14 - 7/22, 2010)



## *Jumelage Accumulé*

EXHIBITION... 「二つの、同じようなもの、積み重ねる」  
8.16 - 8.28, 2010  
Chef d'oeuvre (Osaka)

NOTE... 大阪市内にあるシェ・ドゥーヴルでの個展を2回連続で行った。最初の展示には、「二つの、同じようなもの、積み重ねる」をテーマに右手と左手を同時に使って描くドローイングシリーズを出品した。展示終了後、作品はもちろん、展示台や額、展示に使った全てのものを持ち、会場前で写真を撮った。一ヶ月後の2度目の展示は一度目の展示を立体に再構成した。



**Latest Exhibition View  
(Retouching)**

photo, spray, deleter screen,  
dymo tape, reflective tape  
45.5x56cm  
2010

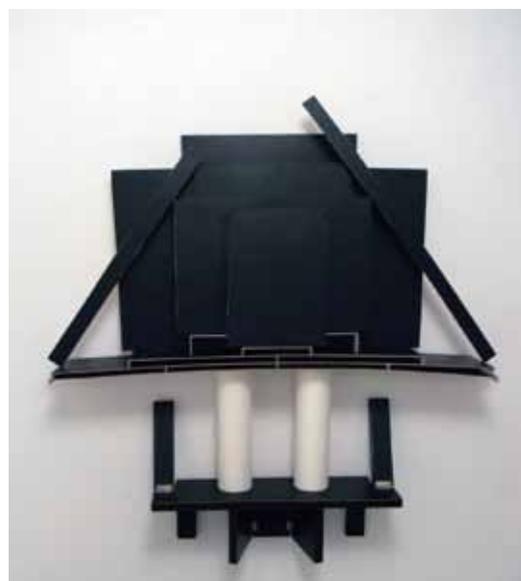
**Ambiance Pilotis**

paper, PVC pipe  
variables dimensions  
2010



**Light Façade**

polywood, reflective tape, paper  
115x105x17cm  
2010



**Black Façade**

polywood, paint, paper  
115x105x17cm  
2010



*From my house (Nara) to Suita Cultural History Center (Osaka)  
by bus, by train and on foot, 6/19, 2010*

## ***Poem for Tables, Chairs, Benches, etc.***

EXHIBITION... 「こみまる 2nd show」  
6.20 – 6.27, 2010  
吹田歴史文化まちづくりセンター (Osaka)

NOTE... 大阪は吹田にある古民家でのグループ展。La Monte Young の作品に、テーブル、イス、ベンチなどを引きずり、持続音を出すパフォーマンス「Poem for Chairs, Tables, Benches, etc. (1960)」がある。タイトルはそこから拝借したが、作品をなるべく引きずらないで、展示会場まで運んだ。アトリエから会場までの時間、ラジオから流れるノイズをカセットテープに録音し、会場でエンドレスで流した。作品には落ち間の三畳分、3X6 の合板3枚を使用した。テーブル、イス、ベンチになる部分を抜き出し、隣の勘定の間に配置した。テーブルの上には搬入時の写真と”なるべく引こずらないで運べ”と書かれた紙を置いた。



***Poem for Tables, Chairs, Benches, etc.***

polywood, hinge, reflective tape, cassette tape recorder,

belt, photo, paper, spray, drawing, etc

variable size

polywood size : 182x273x0.9cm

2010



exhibition view (photo : SKKY)

## *Three, four, five*

「三四五」

6.2 – 6.13, 2010

iTohen (Osaka)



### *Coquille verticale*

wood, hinge, screw, thread, eye bolt, ceramic

183x183x12.5cm

2010

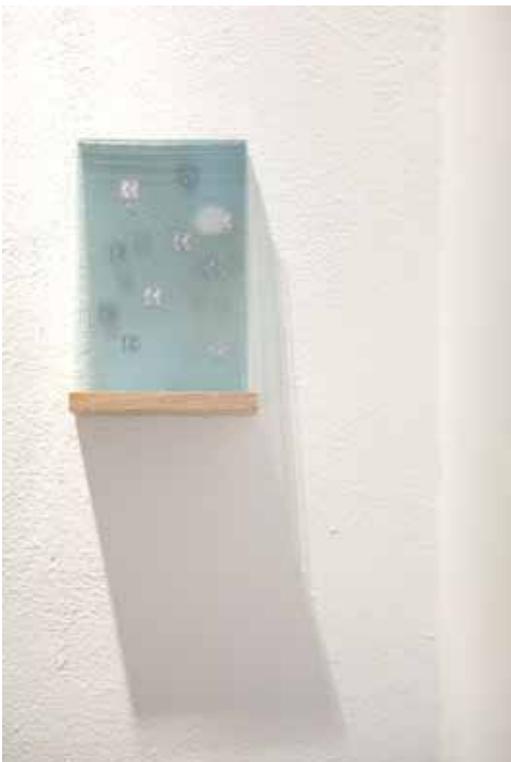


***Formalist's Bookshelf***

wood, hinge, screw, spray, latex paint, oil, book (A6), peafowl feather, metal

40x100x15cm

2010



***Old Numbers***

glass, wood, reflective film

16x11x4cm

2010

— O T H E R  
W O R K S



*document photography, inkjet print, 43x29.7cm*

## ***The World Without Bags***

EXHIBITION... 「ない世界」

9.13 – 10.6, 2013

無印良品グランフロント大阪 Open Muji (Osaka)

NOTE... 江口宏志氏の書籍『ない世界』の出版を記念して行われたグループ展。各ジャンルのクリエイターがそれぞれの「～のない世界」を考えるもの。僕は「かばんのない世界」とし、かばん＝内容物が入る可能性のある袋、がない、つまり、内容物で詰まったものをいかに運ぶかに焦点をあてた作品と取っ手状のものがないものをカジュアルに運ぶ器具を提示した。無印のウェブサイト「北アルプスの天然水 硬度 20 500m 24 本入り」を頼み、麻ひもで編んだベルトを取り付け、会場まで運んだ。

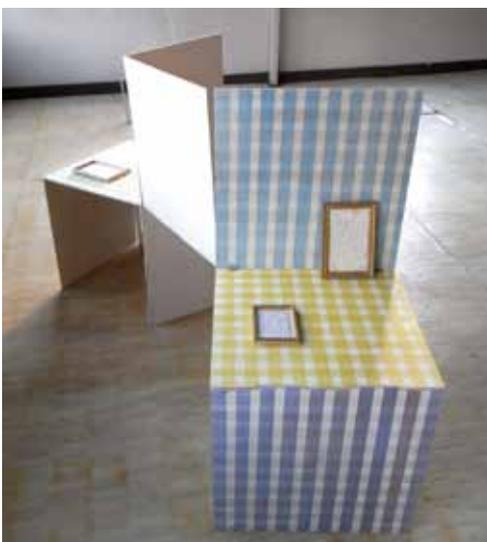


***La Boîte Claire & outline of memories***

plywood, hinge, spray, belt, glass, drawing by sumi on photographe (framed)

80x180x120cm

2011





***High Mountains Are a Feeling***

plywood, hinge, paint, belt, photography, spray, reflective tape

30x150x150cm

2011





*intervention in Bourges, France (7/3, 2008)*

## ***Asphalt Jungle***

document photography

inkjet print

30x40cm

2008

NOTE... フランスはブルージュの街中の一角に転がっていた道路の破片を、砕き、型に入れ成形し、植木鉢をつくった。破片の転がっていた場所に生えていた雑草を植木鉢に植え込み、その場所に設置した。

— N O T — E &  
T E X T S

Shinichi Takeda

Sur “*transracinement*” “トランスラシヌモン” についてのノート



My house (Nara) to FALL (tokyo) 23 Nov 2014

タイトルの『<sup>トランスラシヌモン</sup>transracinement』は「<sup>トランス</sup>trans」と「<sup>ラシヌモン</sup>racinement」を組み合わせでつくった造語です。「trans」は“~を横切って、~を越えて”という意味の接頭語で、transport（運ぶ）などに見られるように“ある場所からある場所”の「~」の部分の意味があり、移動、移行など、動的なイメージがあります。一方「racinement」は、“根づく、根を生やすこと”とあるように大地と関係し、不動、定住、確固たるものなど、静的なイメージを喚起させます。しかし、この二つの語は相反するものではなく、数時間から数日あるいは数万年といった時間のスケールに差があるものなので、厳密に言えばどちらも動的だと言えるかもしれません。早いか、遅いか、ミクロかマクロかの視点の違いです。

さて、この作品は一枚の挿絵から始まりました。19世紀にフランスで刊行された世界を旅した紀行文をまとめたもの<sup>1</sup>で、江戸についての記述の中にそれはありました。あるサムライが銀梅花の植木を両手に抱えて立っているものです。僕は人が段ボールを持ったり、荷物を背負ったり、運ぶ姿に惹かれます。それも大荷物であればあるほど魅了されます。それは人体を延長したある種の美なのかも知れませんが、人体としての限界をある程度公平に示しているからかも知れません。ヒトは荷物を持ち運ぶ事によってヒトになった。人類学者の川田順造さんは『<運ぶヒト>の人類学』（2014）の中で「運ぶ」という能力がヒトをヒトたらしめているのではないかと、ホモ・ファベル（作るヒト）やホモ・ルーデンス（遊ぶヒト）と並び、ホモ・ポルターンス（*Homo Portans*・運ぶヒト）というキー概念を提示しました。運ぶことがヒトの起源に関わってくるということです。四つん這いの動物が両手にモノを持っている姿を創造してみてください。可笑しい状態になると思います。モノを持ちながら四つん這いになることできません。両手で何かを持つということは、「立つ」ということです。

1. Le comte Ludovic de Beauvoir, 『VOYAGE AUTOUR DU MONDE』(plon, 1878)

モノを持ち運び続けた（その必要があった）ことで、ヒトは足のみで移動するになり、手が自由になりました。その手で道具を発明し、荷物を背負い運ぶようになりました。背負うことは重いモノでも長時間、また長距離運ぶことのできる技法です。頭に壺や、たらいを乗せ運ぶ方法もあります。安定性が良いので水を運ぶことに適しています。日本では海岸部に多かったそうです。肩にかけ運ぶ方法もあります。二人で人を運ぶカゴなどもあります。では、最後にもう一度最初に戻って、手はどうでしょう。慎重に運べるかもしれませんが、重いものはそう長くは持てません。重さが体の中心より前にくるので負担が大きいのです。そのため、“手が塞がる”という言葉があるように、手の自由が奪われると他のことができなくなり、立ち尽くす瞬間があります。その瞬間、ヒトは物体に近づくような気がします。もし僕の作品が人体（姿）の物体化であるなら（未だによく分かりませんが）、ここにヒントが隠されているかもしれません。また両手に荷物を持つことは、右の版画のようにその場に留まることでもあります。休憩のひとつとき、あるいは茫然と立ち尽くす瞬間。そのような動きの一瞬に作品が成立する時間があるのではないかと考えています。



銀梅花の植木を持つ太政官の通訳

植木鉢は植物のポータブル化であり、コンクリートやアスファルト

で覆われた土の上でも生きていくことができます。大地に根をはる大木から言わせれば、土の上を漂い、付着し、留まるだけの足の生えた幽霊のようなものかもしれませんが、人の手を借りて移動することができます。そして、自分では一生見ることができない景色を見ることができます。ある侍の腕の高さの風景もを。

シモーヌ・ヴェイユに『根をもつこと』(l' enracinement) という著作があります。人がそれぞれの土地に根をおろしていれば、他の根を取ることはないとその本には書いてあります。そしてヴェイユのつくった反対の意味の「根こぎ」(déracinement) という言葉もあります。トランスラシヌモンは根を持ちながらにして移動することです。それは意思に関わる問題でもあります。しかし、根底を覆すようですが今作品自体に根はありません。根となる部分は FALL の開店当初から置いてあるオブジェをお借りしています。このオブジェを重力によって根とは反対の方向に立たせること。生け花のように枯れることはありませんが、一定の期間だけしか存在しません。その一時にしか成立しない作品です。というより、その一瞬に成立するものが僕にとっての作品なのかもしれません。

最後に運ぶことについて。なぜ自ら作品を運ぶのでしょうか？ジグムント・バウマンは現代をリキッド・モダニティという言葉<sup>2</sup>で表しています。液状化した近代ということです。不安定な時代とも言えます。液体の特性は形態を連続的に変化させ、同じ形に固定されないことです。またつねに形態変化の準備ができている状態とも言えます。ここでは時間が重要な要素です。展示されている作品はその期間だけ存在するものですが、見えないだけでその前もその後も存在するものです。プロセスがあり、結果があるのではなく、その時間の全て、作品が続いているということです。そのため作品を運ぶことも作品の一部だと考えています。そして展示されない時も同様です。僕の作品は固定された形をもっていますが、変化するようにつくられています。それは場所によって変化します。展示空間、移動時、保管される場所などです。それぞれの場所を想定しながらデザインすることは、少し遠くの未来に責任を持つことでもあると思います。

2. ジグムント・バウマン『リキッド・モダニティ』(大月書店、2001)

## artscapeレビュー

### 武田晋一のアプローチ

2011年07月01日号



会期：2011/05/14～2011/06/07

space\_inframince [大阪府]

今回、大阪のspace\_inframinceにおいて武田晋一が発表したのは、店舗で使われていた什器や木箱、安価な合板などを利用したディスプレイ棚や椅子、オブジェなのだが、どうもそれらには家具やデザイン、あるいはオブジェという言葉がしっくりこない。作品のいくつかは家具として立派に機能しているので、美術にカテゴライズするのも戸惑いがある。

あえて家具作品として武田の作品をみるなら、それは少なくとも製品として褒められたものではないだろう。木箱の表面やエッジは何ら処理を施さず、むき出しのまま。ディスプレイ棚はパーツを組み立ててつくられるが、通常の組み立てた家具のように、パーツ同士はぴったりと合わさらない。それは、積み上げられた丸い石のように、箱や板がぎりぎりのバランスを保って積み重なっている。パーツは、武田自身が背負って会場に運んだものであり、彼はゆっくりと一個一個のパーツを並べ、積み重ねていく。Youtubeにアップされた動画をみると、何度もパーツを並べ直す武田の姿がみえる。つまりこれは、初めから組み立て方が決まっているわけではなく、組み立てる度にいちいちバランスを考えなければならない家具(?)なのだ。

武田はフランスに長く滞在したが、フランス語で家具は、「meuble」「mobilier」といい、どちらも「動く」という意味を含む。実際、戦争の絶えない中世の時代、タピスリーや椅子、櫃などの家具は次の戦地に赴く度に動かされるものだった。したがって、パーツにばらして持ち運びができ、組み立ての度に姿を変容させる武田の家具は、家具の原点回帰ととれないこともない。

このような歴史的背景と武田の作品に関わりがあるかどうかは不明だが、「動く」要素がこの家具を特徴づけることは確かだ。ばらばらのパーツは、人間がその時々用途に応じて勝手に作り出し、不要となるや捨てられたものである。会期中にそれらは何度も組み換えられ、外観を変える。その変容は武田によりもたらされるとはいえ、逆に、パーツたちが武田という主に向かって生き物のごとく振る舞い、崩れないように安定を図ろうとする武田に歯向かうかのようでもある。同様に、黄色い輪郭線でできた椅子も、主(=人間)が座れない椅子だ。蝶番のついた輪郭線は、自らを変形することで、椅子のイメージであり続けることさえも拒絶するだろう。このように武田の家具を生けるものとしてみることは無論、筆者の空想以外の何物でもない。だがこの空想が、日常を取り巻くモノと人間との対峙を思いがけない視座から照射しようとする武田の企てによって生み出されたものであることは確かなのだ。[橋本啓子]

twitter でつぶやく

artscape mail magazine  
 [アートスケープメールマガジン] [登録はこちら](#)

2011年07月01日号の  
 artscapeレビュー

- ・ Chim ↑ Pom 「REAL TIMES」
- ・ Chim ↑ Pom展 「REAL TIMES」
- ・ TOKYO STORY 2010
- ・ 100,000年後の安全
- ・ 没後100年 青木繁 展——よみがえる神話と芸術
- ・ 宮崎学 とのりのツキノワグマ
- ・ 石川雷太 展 ノイズ・テロル・サブリミナル
- ・ 佐藤晃一ポスター
- ・ 浅倉伸 Maniacushionoid
- ・ 新incubation3 「On a Knife Edge——二つの向こう岸」展
- ・ 山江真友美 展 一求めよ手の記憶——
- ・ 戦争と日本近代美術
- ・ 五百羅漢——増上寺秘蔵の仏画 幕末の絵師 狩野一信
- ・ 梁展 展
- ・ プレビュー：田中さんはラジオ体操をしない
- ・ ポップ?ポップ!ポップ♡  
コレクションに見るポップなアートの50年
- ・ 村山幸子の世界
- ・ 武田晋一のアプローチ
- ・ 船井裕 回顧展
- ・ オフセット印刷で探るグラフィック表現の可能性——グラフィックトライアル2011
- ・ 文士の肖像
- ・ 6.11新宿・原発やめろデモ!!!!!!
- ・ SOURA-SAISAI 西村みはる・前川奈緒美
- ・ 中島奈津子 展
- ・ キッズ・オールライト
- ・ モノトーンのかたち——陶芸の領域にある表現
- ・ ミツパチの羽音と地球の回転
- ・ 特別展 浅川巧(たくみ) 生誕百二十年記念「浅川伯教(のりたか)・巧(たくみ) 兄弟の心と眼——朝鮮時代の美」
- ・ レイモン・サヴィニャック展——41歳、「牛乳石鹸モンサヴォン」のポスターで生まれた巨匠
- ・ 石川美奈子 展 LINE\_blue
- ・ ジパン展
- ・ 野口久光——シネマ・グラフィックス展
- ・ 手ぬぐい Tokyo@Osaka——200人のクリエイターによる200の提案
- ・ Stack-ing Design展——積み、重ねる、カタチ。
- ・ WHITE 桑山忠明 大阪プロジェクト
- ・ 森口ゆたか——あなたの心に手をさしのべて



*Back of Time*, clock and battery, 2006

Michel Nuridsany,  
curator of <Premiere Vue 5th edition>, Passage de RETZ, 2006

Né à Hiroshima, Shinichi Takeda est un japonais discret qui fourre son nez partout où il ne faut pas et installe, là, dans des recoins, des petites machines bizarres dont lui seul connaît le fonctionnement secret. Avec des minuteriers de réveils, des piles électriques de toutes les tailles, de toutes les provenances. Merveilles minuscules construites longuement, patiemment, dans une sorte de solitude enchantée.

Lorsque je lui ai parlé de Rei Naito que nous avons exposé au théâtre du Rond-Point, qui passait des heures accroupie avec une pince à épiler à installer de fragiles miracles, elle aussi, il a tout de suite souri et acquiescé : oui, il se situe dans cette perspective et cette familiarité-là.

Aujourd'hui, Rei Naito est une star. Shinichi Takeda le sera peut-être à son tour demain.

.....

ミッシェル・ニュリツザニー

「ポミエール・ヴュ5th」キュレーター、2006年

広島生まれの武田晋一は控えめな性格の持ち主である。展示できそうにもない所にまで潜り込み、奇妙な装置 -- 彼のみがその秘密の機能を知る -- を設置したりする。大きさ、出所もばらばらな電池や時計装置でつくられた、小さくも不思議なこれらの作品群は、根気強く、魔法にかけられた孤独ともいうべき時間の中でつくられている。

ロン・ポワン劇場でピンセット片手に何時間もしゃがみ込み、フラジャイルで奇跡的な作品を設置していた内藤礼のことを話した時、彼はすぐさま微笑み、うなずいた。そう、彼もまた同じパースペクティヴ上、同じ世界観の中にいるのだ。

今日、内藤礼はスターである。武田晋一にもまたその番が回ってくるだろう。